11月文楽公演『勧進帳』弁慶　主遣い・吉田玉助、左遣い・吉田玉佳、足遣い・桐竹勘介　写真提供：国立文楽劇場

［文楽］

コロナ禍のなか、３人の切場語り誕生 文楽の未来開く若手らの奮闘

亀岡 典子

新型コロナウイルス禍が舞台芸術の世界を直撃して３年目となった2022年。客席数などはコロナ前に戻ってきたように見えるが、肝心の観客がなかなか劇場に戻ってきてくれない。高齢のファンが多いことも一因だが、誰もが恐れていたように、一度離れた観客がまた劇場に足を運ぶようになるには時間がかかる。もちろん文楽だけではない。能楽界や歌舞伎界をはじめ伝統芸能を中心に舞台の世界はコロナ禍に苦しんでいる。技芸員にも感染者や濃厚接触者が発生し、休演や代役が多くみられた。舞台の世界で感染を完全に防ぎ止めるのはなかなか難しく、技芸員は公演中は出番が終わるとできる限り楽屋に長くとどまらないなど、さまざまな手を打っているようだが、稽古、本番と、密になることは避けられない。コロナ禍はまだまだ終息していない。

そんななか、うれしいニュースが飛び込んできた。4月の大阪・国立文楽劇場の公演から、物語のクライマックスを語り、番付の名前の頭に「切」が付く「切場語り」に、一挙に3人の太夫が昇格した。豊竹呂太夫、竹本錣太夫、竹本千歳太夫で、新・切場語りの昇格は、人間国宝の豊竹咲太夫以来、実に13年ぶりであった。

お披露目の曲は、呂太夫が鶴澤清介の三味線で『摂州合邦辻・合邦住家の段』、錣太夫が竹澤宗助の立三味線による演奏で『義経千本桜・道行初音旅』の静御前、千歳太夫が豊澤富助の三味線で『嬢景清八嶋日記・日向嶋の段』を勤めた。呂太夫の情念と魂の浄化を感じさせる語り、錣太夫の華やかな語り、千歳太夫の孤高の武将の運命を描く入魂の語りと芸風の違いを楽しめる公演となった。錣太夫は掛け合いであったため、この公演では「切」の字はつかなかったが、大阪の夏休み文楽特別公演は『心中天網島・天満紙屋内の段』を宗助の三味線で勤め、世話物に味わい深い語りを披露、「切」の字がついた。ちなみにこの公演では、呂太夫・清介が『花上野誉碑・志渡寺の段』を全身全霊の語りで勤めたことも印象深い。

4月文楽公演『嬢景清八嶋日記・日向嶋の段』竹本千歳太夫・豊澤富助
写真提供：国立文楽劇場

夏休み文楽特別公演『花上野誉碑・志渡寺の段』豊竹呂太夫・鶴澤清介
写真提供：国立文楽劇場

8月20日に国立文楽劇場で開催された「文楽素浄瑠璃の会」も、新・切場語り3人の競演という企画で話題を呼んだ。千歳太夫・富助は、本公演ではめったに上演されない『碁太平記白石噺・逆井村の段』に挑み、

文楽素浄瑠璃の会『源平布引滝·九郎助住家の段』
竹本錣太夫·鶴澤藤蔵　写真提供：国立文楽劇場

呂太夫·清介は『奥州安達原·袖萩祭文の段』、錣太夫·鶴澤藤蔵は『源平布引滝·九郎助住家の段』と時代物の大曲で気を吐いた。3人が競演する素浄瑠璃公演は10月の東京国立劇場小劇場でも開催、演目は大阪と違ったが、いずれも今の文楽界をけん引していかねばならないという気概を感じさせる語りであった。

一方で、残念だったのは、人間国宝の豊竹咲太夫が体調の問題で休演する月があったこと。実際、その前年に顕彰された文化功労者の記念公演である4月の大阪(18日から千穐楽まで)、5月の東京を休演、ファンを随分心配させたが、大阪の夏休み公演には元気な姿で舞台に復帰したのは喜ばしいかぎり。勤めたのは『心中天網島·大和屋の段』。豊かで巧緻な語りで魅了した。やはり、この人がいるといないとでは舞台全体の重みが違う。いま、最高のテクニックと品格に加え、芝居心あふれる義太夫節を語れる別格の太夫だけに、11月の休演は気になったが、2023年はぜひとも舞台に戻ってきてほしい。

咲太夫の休演で奮闘したのが弟子の竹本織太夫だ。師の代役を勤め、実力を発揮した。自身が勤める曲もあったので、大変だったと想像するが、この経験は飛躍にもつながったのではないか。その成果が見事に現れたのが、大阪の11月公演で勤めた『勧進帳』の弁慶であった。

正直にいうと、文楽の『勧進帳』は人間が演じる歌舞伎に比べて難しいところがある。しかも今回は、同時期に東京の歌舞伎座で、市川海老蔵改め十三代目市川團十郎白猿の襲名披露興行で、家の芸である歌舞伎十八番『勧進帳』が上演されていた。はからずも文楽と歌舞伎で『勧進帳』の〝競演〟となったのであるが、文楽の外題『鳴響安宅新関』をあえて、『勧進帳』としたところに、文楽側の意図があったと思われる。

この『勧進帳』が実にすばらしい舞台であった。床は弁慶に織太夫、富樫に豊竹靖太夫、義経に竹本小住太夫と、気鋭の中堅若手を配し、人形陣も弁慶に吉田玉助、富樫に吉田玉志、義経に桐竹紋臣。弁慶は主遣いだけでなく、左遣い、足遣いも最初から最後まで顔を出して熱演。床、人形ともに火を噴くような舞台で、この作品に新たな命を吹き込んだ。なかでも織太夫はこの月、休演の師匠、咲太夫の代役として、『一谷嫩軍記』より、チャリ場の『脇ヶ浜宝引の段』も勤めている。靖太夫も織太夫に食らいつき、火花散るような語

りを聞かせてくれた。人形では、念願の役だったという弁慶を初役で勤めた玉助が、鬼神もかくやと思わせる迫力で命がけの忠義を体現してみせた。日程後半の13日から、『勧進帳』のみ一等席当日2500円の安価でチケットを販売したのも英断であった。通常は第3部全体で一等席5500円であることを考えると、初めて文楽を見ようという人、もう一度見たいと思う人にはいいきっかけになったのではないか。大阪はもともと口コミで、舞台の評判がいいと千穐楽に向けて観客動員が上がっていく傾向にあるが、今回の『勧進帳』がまさにそうだった。ベテランの円熟の芸はもちろんだが、中堅若手のこういう熱の入った舞台は文楽ファンを増やしていくだろう。

ほかにも印象に残った舞台は多くあった。11月の大阪の『心中宵庚申』は、千歳太夫・富助の『上田村の段』、豊竹呂勢太夫・鶴澤清治の『八百屋の段』がともに、人物の心情、心の動きをきめ細かい語りで描き上げ、半兵衛の人形を遣った吉田玉男、お千代を遣った桐竹勘十郎が美しい姿形と情愛を見せ、質の高い舞台を見せてくれた。

その玉男、近年の充実ぶりには目を見張る。初春公演『菅原伝授手習鑑・寺子屋の段』の松王丸、2月の東京公演『平家女護島』の俊寛など、品格と大きさに加え、人物の内面の苦悩や孤独を見事に描き出した。吉田和生は、『摂州合邦辻』の玉手御前、『心中天網島』のおさんなど、師匠であった故・吉田文雀ゆずりの役に存在感を見せ、勘十郎は『心中天網島』の小春、9月東京公演『奥州安達原』の袖萩などで内面描写にすぐれた演技を見せた。

勘十郎は多才な人で、長く文楽劇場のスタンプの絵を描いていたのは有名だが、夏休み特別公演の第1部で上演された新作文楽『鈴の音』の作・演出も手掛けている。カッパやキツネが出てくる素朴で愛らしい物語。文楽を初めて見る子供にもうってつけであった。

若手の自主公演も相次いだ。コロナ禍の危機感もあるのだろう。特に太夫陣がリスクのある自主公演に積極的に挑んだことは、自身の勉強というだけでなく、観客との距離を縮め、義太夫節の生の迫力を体感してもらう上でも大きかったのではないか。全部聞きに行けたわけではないが、豊竹芳穂太夫・鶴澤燕二郎『絵本太功記・尼ヶ崎の段』（第一回みのり会。4月29日、大阪・千日亭／5月4日、東京・那胡の会）、豊竹靖太夫・鶴澤清公『源平布引滝・九郎助住家の段』（7月3日、奈良市・アートホールティンブレ）、小住太夫・清公は、落語家とのコラボレーションの公演で『双蝶々曲輪日記・引窓の段』（10月21日、国立文楽劇場小ホール）を勤めるなど、いずれもこういう機会にしかできない大物に挑み、大きな成果を上げた。

忘れてはならないのは、8月6日、昨年第1回公演が行われた中堅若手の技芸員による自主公演「文楽夢想・継承伝」の第2回公演が国立文楽劇場で開催されたことだ。そも

そもは人形遣いの吉田玉翔（たましょう）が「若手に勉強の機会を」と発案、2021年の第1回公演は、師匠と入門10年前後の若手の弟子が対等の配役で共演するという本公演ではありえない企画が話題を呼び、公演は大成功をおさめた。2022年は前年の経験を生かして若手の技芸員が力を合わせ、公演の資金のためのクラウドファンディングのリターンやプログラム作りなどを自分たちでアイデアを出し合って開催にこぎつけた。今回は、師匠が、弟子の遣う人形の左遣いに回ったり、兄弟子が足遣いでフォローしたりするという、こちらも本公演ではできない公演で、多くの観客を集めた。

文楽夢想　継承伝『二人三番叟』（画面左から）吉田玉延・吉田簑悠・（扇で隠れた）吉田玉佳・吉田玉征・吉田玉男　撮影：桂 秀也

驚くべき舞台もあった。現代美術家の森村泰昌と勘十郎のコラボレーション「人間浄瑠璃」と名付けられた公演（2月、大阪中之島美術館）で、森村が文楽人形になり、勘十郎が「森村人形」を遣うという奇想天外なもの。そもそも森村はゴッホなど名画の中の人物や歴史上の人物などにふんしたセルフポートレートで知られるアーティスト。今度は文楽人形になりきったわけである。作品は新作『新・鏡影綺譚（きょうえいきたん）』。今日十郎という人形作りの匠と、美女の姿を写して作ったお京人形の幻想的な物語。森村は鏡の中のお京の人形にふんしたが、公演後、「現代美術とか伝統芸能といったジャンル分けには実は意味がないということが分

人間浄瑠璃『新・鏡影綺譚』画像提供：森村桐竹人間浄瑠璃プロジェクト実行委員会　撮影：福永一夫

かった」と述べたという。この舞台は、未来に文楽の表現の可能性を開くものともなった。

2022年は、「文楽座」命名150年の記念の年でもあった。4月の国立文楽劇場、5月の国立劇場小劇場での公演に記念公演として冠をつけた。現在、劇団名として残る文楽座はかつて大阪にあった芝居小屋の名前。人形浄瑠璃の劇団を経営していた植村家の元祖、初代文楽軒に由来する。3月1日、技芸員らが文楽軒の墓のある大阪市天王寺区の円成院（えんじょういん）で法要を行い、公演の成功を祈願するとともに、錣太夫と鶴澤燕三（つるさわえんざ）が文楽翁作の『日本歌竹取物語（やまとうたたけとりものがたり）・竹取翁閑居の段（たけとりのおきなかんきょ）』の一部を復曲し、素浄瑠璃で献奏した。

最後に、東京の文楽の本拠地、国立劇場（小劇場）は今年10月末でいったん閉場、建て替えに入り、2029年に再開場することが発表された。文楽でも9月から「初代国立劇場さよなら公演」と銘打たれて公演が行われている。新しい国立劇場の開場までの約6年間、文楽は都内のさまざまな劇場で公演を行う予定だそうだが、最適な場所を確保できることを願ってやまない。

かめおか・のりこ

産経新聞大阪本社文化部特別記者編集委員。平成２年、産経新聞社に入社。おもに古典芸能を担当。紙面で劇評、インタビュー記事のほか、コラム「離見の見」などを連載。著書に『文楽ざんまい』『夢―平成の藤十郎誕生―』、共著に『梅若六郎家の至芸』など。